指導教員によるコメント

本インターンシップ参加者菅生早千江より、実質 2 週間の実習に関する報告を受けました。

データは分析中ですが、サンプル数の少ない小規模データであっても、いくつか報告価値のある興味深い傾向が見られていると思います。

１．報告「教室環境で実施したリキャストの学習者の気づきが、助詞と動詞で異なる。動詞の誤りに対するリキャストは気づきを得ており、助詞の誤用に対するリキャストは気づかれていないものもある」。

○　先行研究では、文法項目の中での気づきの違いに言及したものはなく、これは新規な報告であります。

２．報告「～てくれる、～てしまう、～ていくのような補助動詞が使えないところにリキャストすることで、どういう場面で使うかがよくわかった、という学習者のインタビューコメントを得ている」。

○　文法説明を重ねるより、文脈の中で指導することが効果的な文法形式は、リキャストによる指導に向いているという説を実証する報告です。

３．報告「助詞に対するリキャストには、学習者が、「わかった」というコメントをしていない。なぜこの場面で「に」ではなくて「で」なのかがわかった、というような、文法ルールの再構築はできていない」。

○　既に学習者が何らかの中間言語のルールを構築している場合、メタ言語的な説明の方が効果があるかもしれません。これは、いくつかの仮説に照らして考察することのできる、興味深い報告です。

４．報告「助詞と動詞の 2 つの誤りを一度に訂正しているときの回想コメントは、動詞を訂正されたことのみに言及し、助詞へのリキャストにはコメントしない例が多い」。

○　多くの誤りを一度に訂正しない方がいい、という先行研究の知見はありますが、文法項目上の違いにより、意識化されるものが異なるということも、新規な報告です。

これらについてすみやかに分析を進め、論文として投稿することでこの分野に知見を報告し、博士論文を上梓するべく研究を進めるよう指導します。

なお、ヴァッサー大学の責任者の土屋先生からは、「大変まじめに取り組んでいた」として、A の評価をいただいてきたことも確認しております。

以上

2010 年 12 月 20 日

森山　新（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）